鷗友学園女子中学校

二〇二三年度

第一回入学試験問題

【国語】

時間 45分

【校長からのメッセージ】

おはようございます。まず、左の【注意】をていねいに読んでください。
今日までよくがんばってきました。
これから鷗友学園の入学試験が始まります。
今まで応援してくださった多くの方々を思い、自分のエネルギーにして
取り組んでください。
試験の開始までもう少し。
深呼吸して気持ちを落ち着かせて待ってください。

【注意】

1 試験開始の合図があるまで、中を見てはいけません。
2 問題用紙は、全部で14ページあります。試験中によごれや不足しているページに気づいた場合は、手をあげて監督（かんとく）の先生を呼んでください。
3 解答用紙は問題用紙にはさまれています。
4 問いに字数指定がある場合には、最初のマス目から書き始めてください。なお、句読点なども一字分に数えます。

受験番号	氏名

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校三年生のぼく（瑛介）は一ヶ月あまり入院している。今までに入院してきたのは四～五歳の子どもたちだけだったので、同い年の壮太が入院してくると聞いて心待ちにしていた。二人はすぐに打ち解け、楽しく遊んで過ごし、壮太が三日間の検査入院を終える日を迎えた。

八月六日金曜日。プレイルームに行くとすでに壮太がいたけど、心なしかぐったりしていた。

「寝不足？」

「それもあるけど、今日検査で飲んだ薬、血糖値下げるらしくて、頭がぼんやりしてるんだ」

「ああ、そっか」

それで今日は壮太の母親もそばにいるのか。

検査入院している子たちは、薬を飲んだ後に採血する。薬の種類や体質によっては副作用があるようで、気分が悪くなって吐いてしまう子も見たことがある。それに、検査中は寝てはいけないのに眠気の襲う薬が多いようで、母親たちが必死で子どもを起こしている姿には何度も出くわした。

「俺、ほかの薬は平気なのに。この薬、一番副作用が強いやつなんだよな」

「じゃあ、ゆっくりできる遊びしよう」

「おう。でも、寝ちゃだめだから、いっぱい楽しもう」

壮太は眠そうな顔で笑った。

「ＯＫ！」

だるいけどじっとしていると寝てしまいそうだという壮太と廊下に出て、じゃんけんに勝てば、グリコ・パイナップル・チョコレートと文字の数だけ進めるゲームをした。ゆっくりでも歩けば、眠るのは避けられるだろう。

「俺の足短いから、なかなか進まないな」

壮太は三歩進んでから言った。

「でも壮太のほうがじゃんけん勝ってるよ」
「そうだ！　グー、チョキ、パー、その文字から始まる言葉なら何でもいいことにしよう」
「いいね。そのほうがおもしろそう！」
「グー！　やったね。じゃあ、えっと、ぐつぐつよく煮たスープ」
じゃんけんで勝った壮太は、少し調子が出てきたのか大股で進んだ。
「なんだよそれ。よし勝った。じゃあ、ぼくは、パンダを見に動物園に行くのは日曜日」
ぼくも負けじと長い文を考えて歩く。
「えー、そうなんだ。動物園は土曜日じゃダメなんだ。お、俺もパーか。えっと、パリパリのポテトチップスを買うのは水曜日」
「なんで、曜日しばり？」
ぼくらはグー、チョキ、パーで始まる言葉を言い合っては笑った。
ナースステーション前を通り過ぎようとすると、「ちょうどよかった。時間だよ」と、看護師さんにソファに座らされ、壮太は採血を受けた。
「ああ。血抜いたら、喉かわいたな」
壮太がナースステーション横の自販機を見てつぶやいた。
「水飲めないって、ちょっとつらいよな」
低身長の検査中は絶飲絶食だ。おなかがすくのは我慢できるけど、水が飲めないのはしんどいらしく、子どもたちもよく「お茶ー！」「喉かわいたー」と叫んでいる。ぼくもなんとなく気が引けて、壮太といる時やプレイルームに検査の子がいる時は水分を摂らないようにしている。
「じゃあ、じゃんけんは休憩してゆっくり歩こう」
眠気に負けそうな壮太にぼくは言った。
「ああ、ごめんな。今日の俺あんまり楽しくないよな」
壮太はいつもよりおっとりした口調で言う。検査のための薬でこんなにしんどくなるんだ。
いつも元気な壮太なだけに、つらさがよくわかる。

「眠くてぼんやりしてても、壮太は楽しいよ」
「そう？」
「もちろん」
「だといいけど。おもしろくないチビなんて終わってるもんな」
壮太はそう言って、とろんとした目で笑った。
「壮太はおもしろいけど、でも、おもしろくなくたって全然いいと思うよ」
「瑛ちゃんは、優しいよな」
「まさか」
「瑛ちゃんといると、気持ちがのんびりする」
①壮太が見当違いに褒めてくれるから、何だか居心地が悪くなって、ぼくは入院したてのころはわがままだったこと、最初は低身長の検査入院の子どもたちに冷たくしてたこと、今はなんとなくそのほうがここから早く出られるような気もして、みんなに優しくしてるだけだということを、正直に話した。
「そうか。じゃあ、俺はチビだからおもしろくなって、瑛ちゃんは入院が長いから優しくなったってことか。瑛ちゃんが病気で、俺が小さくてよかったー」
壮太の言うとおりかもしれない。だけど、やっぱり違う。ぼくは入院する前のほうが性格はよかった。「みんなはいいよな」って人をうらやむことはなかったし、「どうしてぼくばっかりなんだよ」といらつくこともなかった。それに、壮太が楽しいことに、身長は関係ない。背が高くて陽気じゃない壮太でも、ぼくは一緒にいて楽しいって思うはずだ。そんなことを言おうと思ったけど、うまく伝えられる自信がなくてやめにした。
そんなことより、うっかり寝そうになる壮太を起こすことで精いっぱいだった。何度も廊下を往復したり、プレイルームに戻ってゲームをしてみたり、次から次へといろんなことをして壮太の眠気を覚ました。
「はーこれで、解放だ！」
十二時前、最後の採血が終わって、管を抜いてもらうと、壮太はプレイルームの床にごろんと寝転がった。

「おつかれ、壮太」
「サンキュー、瑛ちゃん」
「ぼくは何もしてないけどさ」
「なんか最終日に全然遊べなくてもったいなかったな」
「そんなことない。一緒に話してただけで楽しかったよ」
ぼくが言うと、
「うん。俺も半分頭は寝てたけど、楽しかった」
と壮太も言った。
そのあと、昼食ができたと放送が流れ、ぼくたちはそれぞれ部屋に戻った。
「またな」とは言えず、「じゃあ」とあいまいに微笑みながら。

昼ごはんを食べ終えて歯を磨いた後、壮太が母親と一緒にぼくの病室にやってきた。壮太の母親は大きなバッグを持ち、壮太もリュックを背負っている。
「いろいろお世話になりました」
壮太の母親は、ぼくとぼくのお母さんに頭を下げた。
「ああ、退院ですね。お疲れさまでした」
ぼくのお母さんが言った。
「瑛介君に仲良く遊んでもらって、入院中、本当に楽しかったみたいで」
「うちもです。壮太君が来てくれてよかったです」
お母さんたちがそんな話をしている横で、ぼくたちはお互い顔を見合わせて、かといって今この短い時間で話す言葉も見当たらず、ただなんとなく笑った。
「行こうか。壮太」
母親に肩に手を置かれ、

「瑛ちゃん、じゃあな」
と壮太は言った。
「ああ、元気でな」
ぼくは手を振った。
壮太は、
「瑛ちゃんこそ元気で」
そう言ってくるりと背を向けると、そのまま部屋から出て行った。
壮太たちがいなくなると、
「フロアの入り口まで見送ればよかったのに。案外二人ともお別れはあっさりしているんだね。ま、男の子ってそんなもんか」
とお母さんは言った。
お母さんは何もわかっていない。あれ以上言葉を発したら、泣きそうだったからだ。きっと壮太も同じなのだと思う。もう一言、言葉を口にしたら、あと少しでも一緒にいたら、さよならができなくなりそうだった。口や目や鼻。②いろんなところがじんと熱くなるのをこらえながら、ぼくは「まあね」と答えた。

壮太がいなくなったプレイルームには行く気がせずに、午後は部屋で漫画を読んだ。時々、壮太は本当に帰ったんだな、もう遊ぶことはないんだなと気づいて、ぽっかり心に穴が空いていくようだった。これ以上穴が広がったらやばい。そう思って、必死で漫画に入り込もうとした。
二時過ぎからは診察があった。この前の採血の結果が知らされる。
「だいぶ血小板が増えてきたね」
先生は優しい笑顔をぼくに向けると、さもビッグニュースのように、
「あと一週間か二週間で退院できそうかな」
と言った。
「よかったです。ありがとうございます」

お母さんは頭を下げた。声が震えているのは本当に喜んでいるからだろう。
やっとゴールが見えてきた。ようやく外に出られる。それはうれしくてたまらない。だけど、どうしても確認したくて、
「一週間ですか？　二週間ですか？」
とぼくは聞いた。
「そこは次回の検査結果を見てからかな」
先生はそう答えた。
「はあ」
「どっちにしても一、二週間で帰れると思うよ」
先生は、「よくがんばったからね」と褒めてくれた。
一、二週間。ひとくくりにしてもらっては困る。一週間と二週間では、七日間も違うのだ。七日後にここを出られるのか、十四日間ここで過ごすのかは、まるで違う。ここでの一日がどれほど長いのかを、壮太のいない時間の退屈さを、先生は知っているのだろうか。ぼくら子どもにとっての一日を、大人の感覚で計算するのはやめてほしい。
お母さんは診察室を出た後も、何度も「よかったね」と言った。ぼくは間近に退院が迫っているのに、時期があやふやなせいか、気分は晴れなかった。明日退院できる。それなら手放しで喜べる。だけど、一週間か二週間、まだここでの日々は続くのだ。
がっかりしながらも、病室に戻る途中に西棟の入り口が見えて、ぼくは自分が嫌になった。何をぜいたく言っているのだ。遅くとも二週間後にはここから出られるし、ここでだって苦しい治療を受けているわけじゃない。西棟には、何ヶ月も入院している子だっているのだ。それを思うと、胸がめちゃくちゃになる。病院の中では、自分の気持ちをどう動かすのが正解なのか、どんな感情を持つことが正しいのか、よくわからなくなってしまう。
就寝時間が近づいてくると、やっぱり気持ちが抑えきれなくなってプレイルームに向かった。真っ暗な中、音が出ないようマットに向かっておもちゃ箱をひっくり返す。三つの大きな箱の中身をぶちまけるのだ。ただそれだけの行為が、ぼくの気持ちを保ってくれた。悪いことだとはわかっている。でも、こうでもしないと、ぼくの中身が崩れてしまいそうだった。いつも、翌朝にはおもちゃは片付けられ、きれいにプレイルームは整えられている。きっと、お母さんか三園さんが直してくれているのだろ

う。それを思うと、ひどいことをしてるよなと申し訳ない。だけど、何かしないと、おかしくなりそうで止められなかった。

三つ目のおもちゃ箱をひっくり返し、あれ、と思った。

布の箱から、がさっと何かが落ちた。硬いプラスチックのおもちゃの音とはちがう。暗い中、目を凝らしてみると、紙飛行機だ。

ぼくは慌てて電気をつけた。

③壮太だ……。赤青黄緑銀金、いろんな色の折り紙で作った紙飛行機は、三十個以上はある。片手に管を刺して固定していたから、使いにくい手で折ったんだろう。形は不格好だ。それでも、紙飛行機には顔まで描かれていて、「おみそれ号」「チビチビ号」「瑛ちゃん号」「またね号」と名前まで付いている。

壮太は、知っていたんだ。ぼくが夜にプレイルームでおもちゃ箱をひっくり返していたことを。そして、壮太がいなくなった後、ぼくがどう過ごせばいいかわからなくなることも。

明日から、一つ一つ飛ばそう。三十個の紙飛行機。これを飛ばしている間、少しは時間を忘れることができそうだ。

土日の病院はしんとしていた。週末は低身長の検査の子もいないし、三園さんも休みだし、看護師さんの数も少ない。

静まり返るってこういうことだよな。ぼくは誰もいないプレイルームで紙飛行機を飛ばしたり、漫画を読んだりして過ごした。

紙飛行機は似顔絵が書かれた「三園さん号」が一番よく飛んだ。

「なんだよ、壮太。瑛ちゃん号がよく飛ぶように作ってくれたらいいのにさ」

ぼくは一人でそう笑った。

月曜日の朝には、四歳くらいの男の子が低身長の検査入院でやってきた。母親の手を握って、不安そうにプレイルームに入ってくる。

「いろいろおもちゃあるよ」

ぼくが話しかけると、ほんの少しだけ解けた顔をしてくれたけど、まだ母親の手を離さないままだ。

「そうだ、紙飛行機する？」

ぼくは箱いっぱいに詰め込んだ壮太作の紙飛行機を見せた。

「すごいね」
「だろう？　全部、顔も名前もあるんだよ」
「これ、変な顔」
　男の子はおみそれ号をつかんで、少し笑った。
「こっちは『ずっこけ号』。もっと変な顔してるだろう？」
「うん」
　男の子は「飛ばしていい？」と母親に聞く。母親がお兄ちゃんに聞いてごらんと言う前に、
「一緒にやろうよ」
　とぼくは男の子に言った。
「じゃあ、ここからね。せーので飛ばそう」
「うん」
　男の子が飛ばしたおみそれ号もぼくのずっこけ号も、ひょろひょろと少し飛んだだけでそのまま床に落ちた。
「だめだねー」
「本当だな。よし、じゃあ次、もっと飛びそうなの探そう」
　ぼくが男の子と話していると、
「瑛介君、手紙来てるよ」
　とプレイルームに入ってきた看護師さんに封筒を渡された。
「手紙？」
　なんだろうと封筒を見てみると、田波壮太と書かれている。ああ、壮太だ。名前を見ただけで壮太の顔と声が一気に頭の中によみがえった。
　ぼくは男の子に「好きなだけ遊んでいいよ」と紙飛行機の箱を渡すと、大急ぎで部屋に戻った。いったい壮太は何を書いてきたのだろうか。早く読みたい、早く壮太の文字を見たいと封筒の中身を取り出して、ぼくは「うえ」と悲鳴を上げた。中からは、干からびた虫の死骸が出てきた。茶色くなってパリパリになった死骸は、不気味でしかたない。おいおい、どんないやがらせだ

よと、手紙を読んでみる。

えいちゃんへ

２日間だったけど、超楽しかったよな。ありがとう。また遊べたらなーってそればっかり考えてる。チビは最悪だけど、えいちゃんと会えたし、チビでもいいことあるなって思ったよ。

えいちゃん、「外はどれくらい暑いんだろうな」って言ってたけど、マジでやばいぜ。毎日たおれそう。昨日おれの家の前でバッタがひからびてたから送る。な。本当に丸こげになるだろう。

壮太

ああ、壮太。ぼくもだ。もう一度遊べたらなってそればっかり考えてる。病気になってよかったことなど何もないけど、壮太と出会えたこと、それだけはラッキーだった。

それにしても、外は本当にすごい暑さなんだ。干しエビみたいに干からびたバッタの死骸はかわいそうだけど、暑さはよくわかる。いくらテレビで映像を見ても、気温を知らされてもわからなかったのに、このバッタを見ているだけで、頭の上が熱くなって喉がカラカラになりそうだ。

④

ぼくはお母さんが帰ってくるのを待てず、看護師さんに言って封筒と便箋をもらった。壮太にすぐに伝えたいことがあった。

壮太といる間、何度か「小さくたっていいじゃん」そう口にしようとした。遊びを考える天才で、みんなを笑わせることができる。壮太のその力は、背の低さなんて余裕で補えてるって思ってた。でも、壮太を傷つけたらと不安で、言えなかった。

だけど、壮太は病院にいるぼくに、この夏の暑さを伝えることができる。いなくなった後も、プレイルームのぼくたちを楽しませることができる。壮太はとにかく最高なんだ。壮太が壮太なら、小さくたっていい。そう。小さくたって全然いいのだ。

干からびたバッタを横に置いて、ぼくはベッドの上の小さな机の上で手紙を書いた。

これ以上ない暑い夏が、今、始まろうとしている。

（瀬尾まいこ『夏の体温』）

問一　――線部①「壮太が見当違いに褒めてくれるから」とありますが、ぼくはなぜ「見当違い」だと思ったのですか、説明しなさい。

問二　――線部②「いろんなところがじんと熱くなるのをこらえながら、ぼくは『まあね』と答えた」とありますが、このときのぼくの心情を説明しなさい。

問三　――線部③「壮太だ……」にこめられたぼくの心情を説明しなさい。

問四　――線部④「ぼくはお母さんが帰ってくるのを待てず、看護師さんに言って封筒と便箋をもらった。壮太にすぐに伝えたいことがあった」とありますが、壮太の手紙とその後の内容から、ぼくは壮太にどのような返事を書いたと考えられますか。ぼく（瑛介）になったつもりで書きなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

①住宅で働く場所を確保することが意外と大変であることが、２０２０年春の緊急事態宣言下でわかってきました。テレワークの会議で聞くときはイヤフォンで対応できても、話すときに家庭の生活音が入ることなど、音の問題が一番大きいように思います。カメラで映る背景に、家庭の様子や、家族の様子が入ってしまう課題も見られました。何よりも子育て中の家庭では、子供たちの存在が仕事に集中しにくい環境であったでしょう。外に仕事で出ていた人が、家で仕事をするのも不自由で、家にいた家族も、これまで仕事で出ていた家族が家にいることで、様々な不自由さを感じました。そう考えると、家庭に「仕事」という新たな機能が求められているのですが、すぐに対応できない日本の狭い住宅事情があります。そのため、ちょっと出かけると仕事のできる、自宅に近いサテライトオフィスのニーズが生まれ、次々と誕生しつつあるところです。これまでも、シェアオフィスとして、始まっていた事業もありましたが、これまでの利用者の多くは、フリーで事業をしている方や、出張先での仕事場として利用することが中心だったと思います。

しかし、都市部のサテライトオフィスはむしろ苦戦しているように思います。筆者も大阪駅前のコワーキングオフィスの会員ですが、これまでここでは遠方の方とのリアルな打ち合わせや、仲間との会合の場に会議室を借りていました。外出時にできた仕事の空き時間に、この場所で一人仕事をすることもありました。また、ふらっと顔を出すことで、知人や仲間にばったり会い、情報交換を行ったり、新たな出会いを紹介いただいたりという場になっていたのです。コロナ禍では外出の機会が減り、会議もオンラインになり、利用ニーズが激減しました。出張先で活用していた方も、出張がオンラインでの打ち合わせに変わり、自宅での仕事がしにくい会員も、より自宅に近い身近なところでその場を求め始めたのではないかと思います。こうしたリアルな場でのコミュニティが、オンラインのコミュニティに置き換わっていっている感覚があります。これまで、都心部のコワーキングオフィスの会員であった、少し先進的な活動をする人たちこそ、その動きに敏感なのではないでしょうか。

こうした場所が、住宅地の中心部や、暮らす場所の近くの駅前に今後も増加していくことで地域のあり方も、そして、コミュニティのあり方も少しずつ変化していくことでしょう。

【中略】

これからどのような「まちづくり」が求められるのでしょうか。これまで住宅のあるまちでは、住宅での役割として、睡眠をとる場、子供を育てる場、高齢者を介護する場、など家庭生活をおくる場としてのものでよかったわけですが、通勤せずにテレワークとなると、そこに仕事をするという役割が生まれます。遠くや人ごみへの外出を控えるようになると、住宅のある近くでの買い物や運動の場が求められるようになるでしょう。これは、それぞれのまちの機能として多くのことが求められるようになるということです。

住宅でのテレワークが難しければ、近くの地域でテレワークができる場所が求められ、身近な運動のために散策路の気持ち良さが求められ、コンビニのようなちょっとものが買えるお店が、重宝されるようになるでしょう。これは地域まちづくりに大きな変革をもたらします。極端に言えば、これまで「寝られたらよかったまち」が、「働いて、遊べるまち」になることが求められているのです。

この変化は、人々のコミュニティの変化にもつながっていると思います。これまで仕事を中心として広がっていた人間関係も、テレワークが進むことで変化していくでしょう。これまで住宅のある地域に目を向けなかった人々が、地域での生活時間が長くなると、自然と地域での人間関係の繋がりにも、目を向けるに違いありません。もちろん家族との関係性もそうでしょうし、これまで住宅中心の活動範囲で動いていた家族がいれば、その家族とともに、地域のコミュニティにより深く関わることになるでしょう。

仕事場に左右されずに住宅を選ぶようになれば、本当に自分が生活したい地域を探すことになります。本当に生活したい場所は、きっと暮らして気持ちの良いまちに違いありません。求めて選んだまちには、積極的に関わることになるでしょう、そしてその思いを同じくする人々のコミュニティが生まれ、本気で皆が関わるコミュニティになっていくでしょう。住まいを固定する「住まい手」、そして二拠点や多拠点生活をおくる「来訪者」、お互いが気持ちよく地域で暮らすためには、地域での支え合いや、感謝しあえるコミュニティが求められます。

これまでよく、「まちづくり」は不幸な出来事から始まります、と言ってきました。それはマンション建設反対や、伝統的建築の消失がきっかけの場合が多かったからでした。今回はコロナという、いわば世界中の不幸が始まりで、日本中でも起こっている不幸な出来事ですから、この機会を活かさない手はありません。②この、社会的、世界的な不幸をきっかけに、地域まちづくりが発展し、魅力あるコミュニティがますます日本中に増加していくことを願っています。

（藤本英子『公共空間の景観力』）

問一　――線部①「住宅で働く場所を確保することが意外と大変である」とありますが、それはなぜですか。【中略】までの文章をふまえて説明しなさい。

問二　――線部②「この、社会的、世界的な不幸をきっかけに、地域まちづくりが発展し、魅力あるコミュニティがますます日本中に増加していく」とはどのようなことですか。【中略】以降の文章をふまえて説明しなさい。

三

各文の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) オペラ座でカゲキをみる。

(2) ジュクレンを要する仕事。

(3) ノウリに浮かぶ。

(4) 提案に異議をトナえる。

(5) このうわさはジジツムコンだ。

鷗友学園女子中学校

二〇二三年度

第一回入学試験　解答用紙　【国語】

受験番号

氏名

得点

一

問一

問二

問三

問四

壮太へ

瑛介より

二

問一

問二

三

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

このらんには何も書かないこと